

昨年の秋、徳島県の第1番札所「霊山寺(りょうぜんじ)」から、県内最後の第23番札所「薬王寺」まで、160kmの歩き遍路をした。

今年の「第2次」はその続きに行く。10月28日(金)、第23番「薬王寺」側のJR日和佐駅を出発して、高知県の太平洋沿岸を西に室戸岬、高知市、足摺岬へと進み、愛媛県に入って西予市の第43番札所「明石寺(めいせきじ)」参拝の後、大洲市まで進んで今回の遍路を終え、11月17日(木)神戸に戻った。500kmを3週間かけて歩き、20の札所を巡った。昨年と合せると、寺数では88カ所の半分、距離では全体の6割ほど進んだことになる。

■ 出会いの旅

今回の旅は人との出会いの旅となった。出会いの一つは、この10年間の歩き旅は全て一人だったのが、今回は偶然知り合った人と一緒に旅をした。しかも、相手は日本語が全くしゃべれないアメリカ人の男女2人~3人で、2週間寝食を共にした。

出会いの二つ目は、「逆打ち」のお遍路さんだ。「打つ」というのは四国遍路で使われる用語で、参拝すること。徳島県の1番札所から88番札所を目指して四国を時計回りに巡るのが順打ち、香川県の88番札所から1番札所を目指して左回りに巡るのが逆打ち。逆打ちは御利益が大きいといわれ、閏年に行くことが多く、今年はその閏年。こちらは順打ちなので逆打ちの人と行き会うことになり、話をする機会が多かった。

三つ目は、お接待。たくさんのお接待を受けた。住民と遍路との信仰と交流の長い歴史を感じる。

(1) 同行のアメリカ人

最初の出合いは、アメリカ人の女性2人。1番から88番まで通しで歩き、その足で高野山を12月初旬に参拝するという。ロサンジェルス在住、台湾出身のシューヤン(60歳前後?)、とペンシルベニア在住、白人のキャシー(65歳)だ。2人に会ったのは遍路3日目の午後、コンビニでその日に泊る宿の相談を受けたのがキッカケだった。近くには私が予約している民宿しかなかったので、紹介して一緒に泊った。その後も行程は同じなので一緒に旅をして3日目。レイモンド(香港出身アメリカ人男性65歳)が加わって4人になり、一緒に4日間旅をした。



<キャシー、シューヤン、レイモンド>

その後、高知市に入る前にアメリカ人3人とは別れて3日間別行動となったが、遍路10日



目に 36 番青龍寺に参拝した後、また合流した。その時にはシューヤンとレイモンドの 2 人だけで、キャシーは途中でケガをしたので帰国したらしい。以来、私が途中の 43 番で区切るまで 3 人一緒に旅をした。シューヤンとは延べ 15 日間、レイモンドとは 13 日間一緒だったことになり、レイモンドとは狭い 6 畳部屋に布団を並べて寝たことも 2 度ある。

シューヤンは元小学校教師。陽気で人懐っこい大阪のおばちゃんタイプ。身体は小さいが、

わたしのリュック 4.5kg の倍以上のリュックを背負って峠を駆け登るパワーと闘志がある。アメリカで緻密な遍路計画を組んで来ており、スマホを使いこなしていた。

一方、レイモンドは 55 歳で現役を退き、絵やテニスや釣りや詩作などの趣味が豊富で、明るくマイペースの人だ。彼はほとんど下調べもせずに来日し、駅前に置いてある簡単な 88 箇所番号が書いてあるパンフレット 1 枚を持って歩き、時々野宿もしていたようだ。しかし礼儀正しく、同室の際には、部屋に入ると先ず湯を沸かしてお茶を入れてくれ、朝も起きると 1 番にお茶を入れてくれる。キャシー・シューヤン・レイモンド、3 人共スペインの巡礼の道「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」を歩いた経験があるという。あの歳で、言葉の壁を乗り越えて四国の山野を駆け巡る度胸とパワーには感服する。

ずっと一人旅が性に合っていると思っていたのに、今回なぜグループ旅ができたのか不思議に思う。多分、宿の予約を取ってあげる必要があったこと。気疲れせずに済んだ相手だったこと。幼児程度の英語力では込み入った話ができなかったこと。など考えられるが、要するにソリが合ったのだろう。2 週間、笑いの絶えない遍路となった。

(2) 出合ったお遍路さん

・岐阜県の男性 50 歳代。昨年の春から 88 カ所を 3 回巡り、他に西国三十三所の幾つかも巡った。テント・寝袋・食器など 20kg 以上を背負って旅をしていて普通の宿には泊らない。まだ何時帰るか決めていない。

・ 80 歳くらいの目立つ姿の陽気なおじいさん。何でも 76 回巡ったそうだ。

・ 岩手県の男性 50~51 歳。人生は一度と思って会社を 50 歳で退職し、四国遍路に来た。1 日平均 40km を歩く。遍路を終えてから九州、沖縄へ渡って歩き、年末に帰郷の予定。彼と一緒に同じ方向に出発したが、速くてアツという間に見えなくなった。

・ 和歌山の男性 70 歳代。4 回順打ちをして今

回は逆打ち。英語がペラペラだった。兄弟はサンフランシスコに移民として渡っており、本人だけ帰ってきたようだ。移民は沖縄、和歌山、広島が多いとか。

・ 逆打ちの 30 歳代男女。41 番辺りで会ったので 3 週間ほど歩いているようだが、これまで宿に



<峠の下り、筆者の後ろはレイモンド>



<逆打ち遍路と情報交換>

泊まったのは2回だけ。寺の通夜堂や遍路小屋やキャンプ場利用しているという。

- ・その他、寝袋を持ったガッツのある日本の若者にも多く会えた。内向きの青年が増えたと聞くが、捨てたものではない。
- ・初日の宿で、88歳と81歳の夫婦が順打ちで通しの歩き遍路をしている、という新聞記事を見た。シューヤンから11月26日、66番雲辺寺（うんぺんじ）手前の民宿岡田で同宿になり夕食を一緒にした、と興奮ぎみのメールがあった。



<88歳のご夫婦と宿の主人、シューヤン撮影>

- ・米国人と別れている間、愛媛の菊池さんと1日半一緒になった。久しぶりの日本語なのでしゃべり過ぎてしまい迷惑だったろう。後日、菊池さんに過分なお接待を受ける。

（3）お接待

- ・国道55号を歩いていると、車から降りてきた若い男性に特産のピーナッツ菓子を頂いた。
- ・道路脇の溝に座ってお昼を食べていると、軽トラックから下りてきたおじいさんに小ミカンを沢山頂いた。甘かった。
- ・地域の八幡宮祭りを見ていると、陽気なおばさんから餅まきで拾った餅を頂いた。
- ・車でわざわざ追いかけて来たおばさんに大きなミカンと共に、旅のアドバイスもたくさん頂いた。
- ・橋の欄干の横に座り込んで、道行く遍路に黒糖アメを渡すおばあちゃん。
- ・37番岩本寺の4km手前に「歩き遍路接待所・風自遊庵」を掲げる民家があり、庭のテーブルで美味しいコーヒーとお菓子の接待を受けた。60歳代に見える石坂さん夫婦が2年前から始めたボランティア活動。良い宿の紹介を受け、それを利用して大いに助かった。
- ・他にもたくさん遍路休憩所があり、部屋の管理やトイレの掃除など、地域の方々のボランティア活動に支えられている。
- ・1日半一緒に歩いた菊池さん。それから10日程経ち、既に西予市の自宅に戻っていた菊池さんへ、近くを通るので挨拶の電話を入れた。そのあと西予市の宿に着くと、既に3人分の宿代が半額支払われており、翌日の朝には3人分の昼食用おにぎり弁当とみかんの差し入れまでであった。弁当は美味しくありがたかったが、過分なお接待に恐縮する。
- ・レイモンドは個包装のおつまみをポケットに入れ、出会った人によく配っていた。みなさん驚いて、エビで鯛を釣るようなお接待のお返しを頂く事もあった。
- ・この他にもたくさんのお接待を受けた。

■旅を終えて

今回、出発を1日延ばした。理由は体調に不安があったからで、胃と心臓がずっと前から良くなかったのだ。それでも恐る恐る歩き出してみると、2~3日で全く気にならなくなってしまった。ご飯をたくさん食べても大丈夫、食べたあと横にならなくても大丈夫。胃の調子が良いと不整脈も出ない。奇跡のように快復したのは家から離れたからだろうと密かに思っているが、「お大師さんのお陰です」と妻には言っている。